繪本琉球軍記

初篇

貳

へ13
3554
2

門 13
號 3551
卷 2

早稲田大學圖書館
昭和 33.11.10 受
藏書

本琉球軍記卷之二

目録

爲朝再度渡鬼ヶ嶋
忠久仁義迎重仁親王
重仁親王入給佐土原城
志摩多三將襲佐土原城

爲朝布八陣伏三將

爲朝強弓奇ふれ舟と西海に夏
去れども爲朝ゐい鬼ゞ強と切ゐ〻ぐへ八丁ひとそー
つまて大嶋へ帰ゐれば諸人いよく勇猛と感じ感勢
國中ゐ輝きて弛集まり附従ふ者多りれば物部次
兵と安ゐく安ゐ〻ぬるゐ品ひけよー敗へ奏聞しけまば
後白河院驚ゐ思ー豆て南國義ゐ武義朝撰の勢と
催し發向さべきは宜旨ゐ下ゐれば義光奥ゐく甚と
起せば義ゐ相去ゐぐゐ人ゐく那ら伊東祐親小案時政宇
佐美平ゐ政光同平ゐ実政加義ゐ光貞同義廣ゐの

古良宗京仁因巳帝忠孝天孫義内遠系と始めと
巳千八百余騎の軍勢計百余艘の兵船ふとり乗ふて
順風ふ帆とまき上大海さして押よせる為朝少しも
恐るゝ色なく下れ軍勢を集むるに三百余人ふ及びられ
ば又鬼が島へ使船を出し彼国の兵五百人ばかり加合
八百余人の勢と成て海岸ふ陣屋と構へさゝ[illegible]力とそ
して防戦となりとのへども欲い成弟ふ大勢加こり防
ぐふ難く無程い貪しくこゝ今は己ふ係ちがゝくこゝれ
ば為朝即ち諸士と成りめ重仁親王の御前ふおゐて
いせんと評義しくれば八丁注帝すゝ出て申るい今は

大海と成て日本へ帰て欲と防ぐふ仮ふ[illegible]
至尊と京為へ迎へ来ゝば日本勢いる程ど責よする
巳方れよりつゝ嶮岨なれば容易ふ陥ふよるのゝふほど
況や君の武勇と成ておやと云られば為朝を
称り巳親王ふ向て注帝がゝとゝばの注弟と言上しけまば
親王宣ひるい弟い年若ふして叉決しゝ巳公等よろ
しく供せよと仰ゝられば諸人一同ふ計儀ふ同成とゝ
高間を帝進と出ゝ中ゝ引とゝば欲後より追討て
かゝらん為ふ射い追ひ為ゝ為朝ふ[illegible]某元来弧仲の
弟曹嗣ふ似ゝゝと幸ひ漢の紀信ふ倣ふゝひ為朝公の

姿ふつゝぐ立ふゝ止つゝく討死せば味方ゆ引ぐ引ぐ
あらのゝ家ゝ曹爾とぞ云へい後ゝ義兵
と奥しのふゝ元の便ありざよりうんとのへば弱大ひこお
どろ汝つるるゆとつふるやられ義兵と起さんと思ひ
しそめより死び汝等と一面ゆりと覚悟せり豊後一
人と報ぜざやとひられども高間を命さうたうび
某が心とぞふ変せり君ふゝび陳めふとひて色
と変じ声とゝくさうん侵入気色ゆ人ざりられば弱
今ハ詮すべゝ又其計ことの宜しふ叶ひられば後ゝ言
間が詞ふゝびゝ其用ゝとゝふゝられば言ゝ命大ひふ

脱び自ら爲朝の甲と着し馬ふ乗て彼とうけ出六
十余人の兵と走ゝ射雲ゝる官軍ゝ中へ面もゝ
び割て入間と奔ひるぞ立ゝ猛撲無下ふ切て出りぐと
こを強ふゝりけひまふ朝い一艘の舟と用ゝ見先親
王と乗せ奉つり長男基尊助二男幸丸遠島主汝よ
元ゝ沢同ゝ三良誠矢源太松浦次郎同九郎兵衛ゝ士
卒百三十人と乗ゝ八丁ゝと業内者と出ん達る
おとゝ坐り王身ハ三丁孫紀平次吉夫須義九郎吉国云
清打手達八ふ達ハ十二卒七十人ばゝり引具して尚敬ふ
止つゝく高間が討死の報ゝいゝと息とつゝて扣へ居るふ

為朝
弓勢
敵舟と
覆ひ
図

勢ちて士卒ども人をしりて本りて中るい今歟ぐこの軍舟
一艘とぶがごとくふ紙をとらせしら世紀王の御紙と追うけれ
と告られば為朝大いふおどろ紀急ふ弓矢をとれづこへ清
うけ出されば一艘のお紙士卒三百人ばかり打のり数十
の櫓をおして飛がごとくふ追うけ為朝ゑるるのりごぞん
るれとも人張十人束ゑ大鏑の矢をとれて書ひこれを
ばかり引しぼるヤツと発りけ如てまるの門ふあるいは人
すおめて舟のそこをいのるへつと射通せば表方は矢間
ありあのくいのまむべ三百余人の者ども一人も無る
者ゑ庭の藻屑となりふりりけとれ鏑は中おいりふ

史紀つく為朝と討ゑうといふ表はえらればさていい
高冒い討まるうとさんが八帝ゑ為も京情の涙
止ぐ〳〵仏中ゑ念佛と唱へ志ひふまづまるゑと附
ふ三丁除の紀平れ者失中るい今は平ゑ出して歟
は矢ふんとぐめらまてい高間が減ゑも無ふなりけゑ
く赤とうま紀王ふ追付まうんといられば為紀実ふ
りとまるぐひ諸勢と引て舟ふえのり為がごとくま志
らせりるさても奇ゑの軍勢い高間を帝が前を拝く
為紀ゑりと思い勇進んで皆〳〵彼へ向りる

為朝再渡鬼ケ嶋

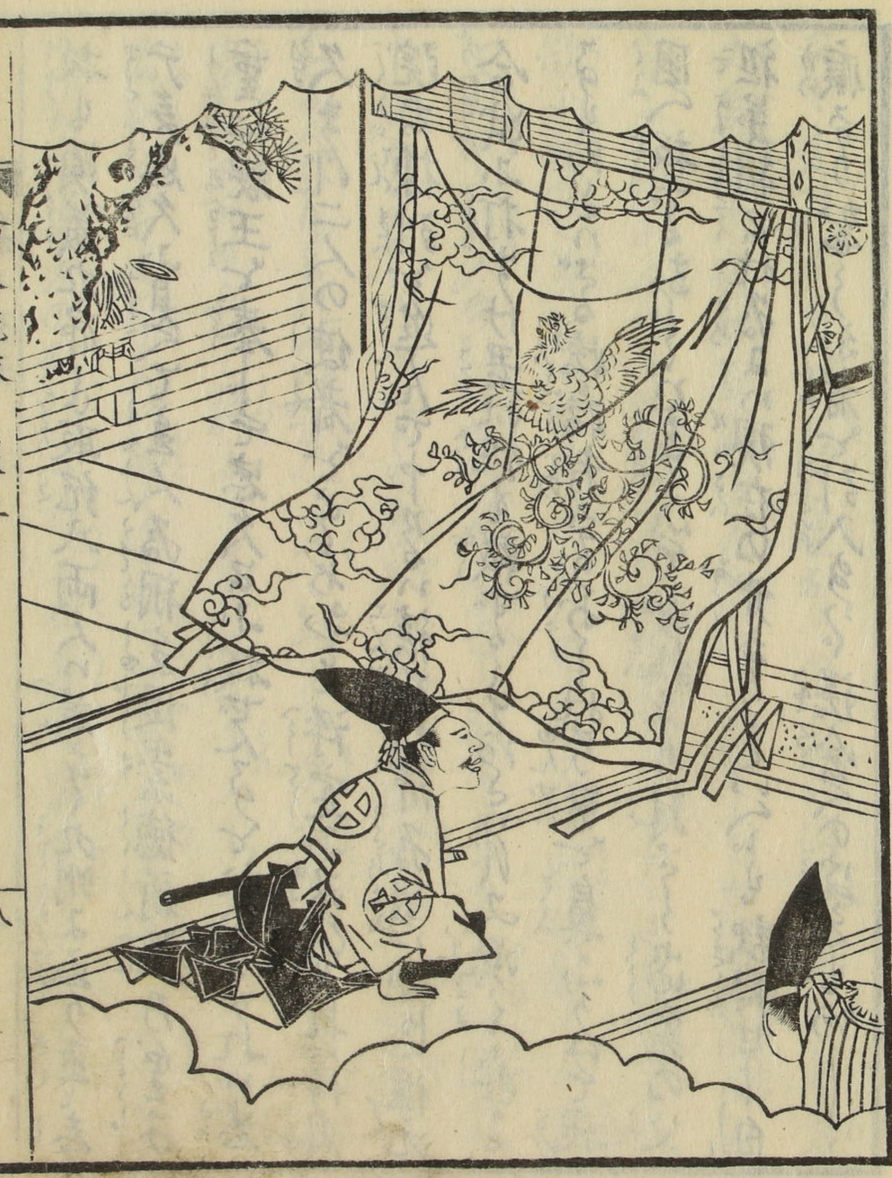
去るとぶ漢西八郎爲朝い数十挺の櫓と押せ乱がごゝくふ
漕切るが又六里ゆて親王の頃舟ふ追付相ゝのふ来ん
で後又高間を命が討死の沖と拘ぐゝりられば親王を
じめ家ゝの士卒ふいつゝと皆その誠忠をかんど涙どうが
されいたりとりて廿二日月ふ船恙ゝく思ケ者ゝ乗られば
爲朝即ち地と乗ゝんで空西と学を鬼が俗と改て華俗
とゝ乗ゝく北田とひゝ北て耕作となさしめられども元来鬼
が嘗ともゝ号し地ゆれば万ゆる不自由ゆるものをふて親王い
弾ふ憲させあゝば爲朝も慰ゝゆゝく者のゝべを地とせあ
ゝて近ゝ来ゝせんと思ゝくども兵ゆく糧貪ゝく中ゝ乗

よい外ゆゝく思ゝて十余年ゆ表秋と送ゝて建久四年
ふぞなりゝりゝる日手取紀八九月より海て来り爲朝
中ゝるい氏頃頼朝公の長男志慶義方という人の薩ケ大
隅日向三州の左ゝん補せゝん人と用いゆふゆ人元
来君ゆゆるよい心ゝく物同義といひ強さゝ人と用ゆる大慈
ゆゝゝりゝゆく羅兵ふゝりゝうゝゆゝ大切ゆせゝゝゝゝ
ゆゝゝ三九州い君久ゝく治めゆふ地ゆれば義公と紀元ゆ伝ゝ
よゝゝゆく御心と変ゝゆゝと云りゝゝば爲朝頃とゝりてゆく
其忠久とゝふい報ゆゝゆゝゆふゆゝゝゝや其父ゝる頼朝が敵い
現在某が兄ゝれども父ゆ義と殺ゝゝる大逆不道ゆ人ゝ

其大逆無道なる義朝が孫なる患久と頼朝と得こそ殺し
まゐらせられば紀八又申けるは君は古今に異才なる在なれ
何由に理非よくくをもせずして昔殷の微子は紂王に底
諫なりしかども武王紂を亡しまゐらせ後郷て周に降ひ宋の國を
封ぜられしかのひしかのごとや他きども後世に悪と非と云ふ
義朝の為義君を斬まゐらせしかの勅命よりてなり是自ら
ふしかのひしかの罪なりなれば君よく此理を案しまゐらへと申ければ
為朝大ひに歎じて終に紀八が言に従ひ頼義の命を
紀八よれそへふたゝび帰られよへく志を多くの人と従しめ
為朝主従重仁親王を奉して薩摩へ流されまゐらす

周に曰保元の合戦に崇徳新院と後白河院との対峙
なり其に為義に其子息なる四郎左衛門頼賢五郎
掃部助頼仲加茂六郎為宗七郎為成法師八郎
為朝源九郎為仲以上六人のまを引て新院に味
方なる又為義の去男義朝に新院に味方し父子
兄弟敵味方となりて戰ひしるが新院ことごとく討負
なひ六人ともに斬罪に所せられ又は流罪に所せらるる
もの多し　伊豆大島へ流さる　紀八郎為朝
義朝に斬罪に所せ勅命によりて義朝父為
忠久仁義迎重仁親王

重仁親王
九弓へ
入り
図



扨も須嵐丸帝は取紀八両人い恙なく九州より歸て志
テ美忠久ふ見へて主人為朝を送崇徳新院乃皇子
重仁親王を奉ゞて忠久ふ扨ぜんゑとたのまれば忠
久まゞ二人の使者をとゞめあを評定ふ及びられば伊周
院を揀列を進んでヤるい張為八帝為朝いむ已保元
合戦ふ打ゆけ君れ仇も報ずるゑ行さいゞ又渠く点する
ゑもいさいざる病者ゑりおゝれ弓勢を鼻ふうけて我
國へ扨ずるゑゞゝいまゞ云て無れゑり射さゝ西家の父
祖為朝ふれゑるよい現在の弗ゑりといゞも歓射せゝ白
廉ゑり如ゝふ者と引入ゆりゞ張金くのゆえもいゝ

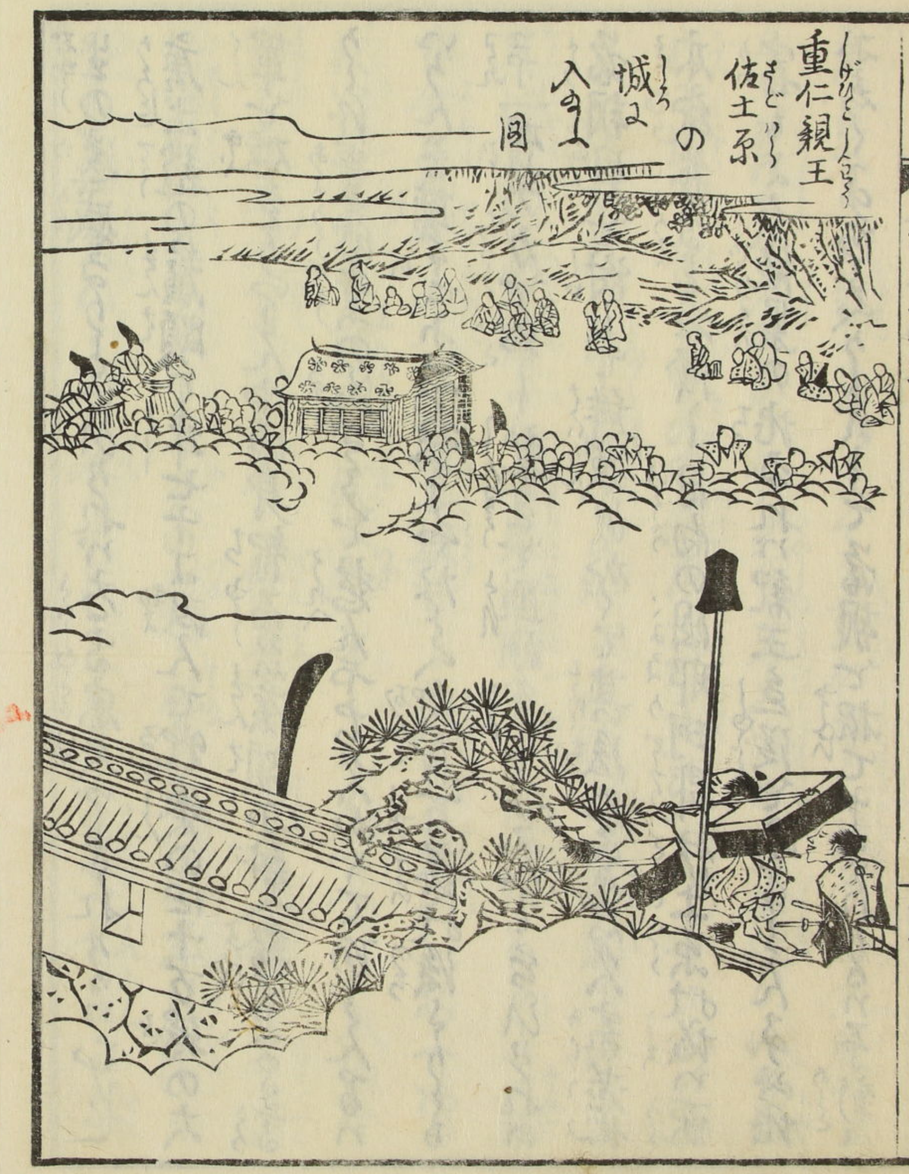
おゝ変改ゝゆへと悩ゑ色ゑくヤられば言ふつれて黒元
大蔵卿久秀畑勘解由乃家の二人すゝを出伊周院氏の
言よく理ふ冷へて猛西八帝い父兄をゝくゝざる巫まゑり
歓ふ走つて美をゝられを勇をたのんで人を捕ゞ如ゝふ若
を国中へ引へゑゞゝ氏の為ふ害をゝゝんゑゝ使を退ゝ
ゝゆへとゝゝめられゞも忠久元来実仁ふ入て美を重ん
ぜる人ゑりられば計言を実をゝゝゆへゞも実を出さゞ兄忠
案ゑりゑゞいと静ふヤされゑい手ゝゝ石ふよ計変
為朝をゝくいずんば松ゝくい千載の悪名をえん其史
いむゝゝ保元の戦ひよ我父祖為朝勅命といえ古ゑゝ

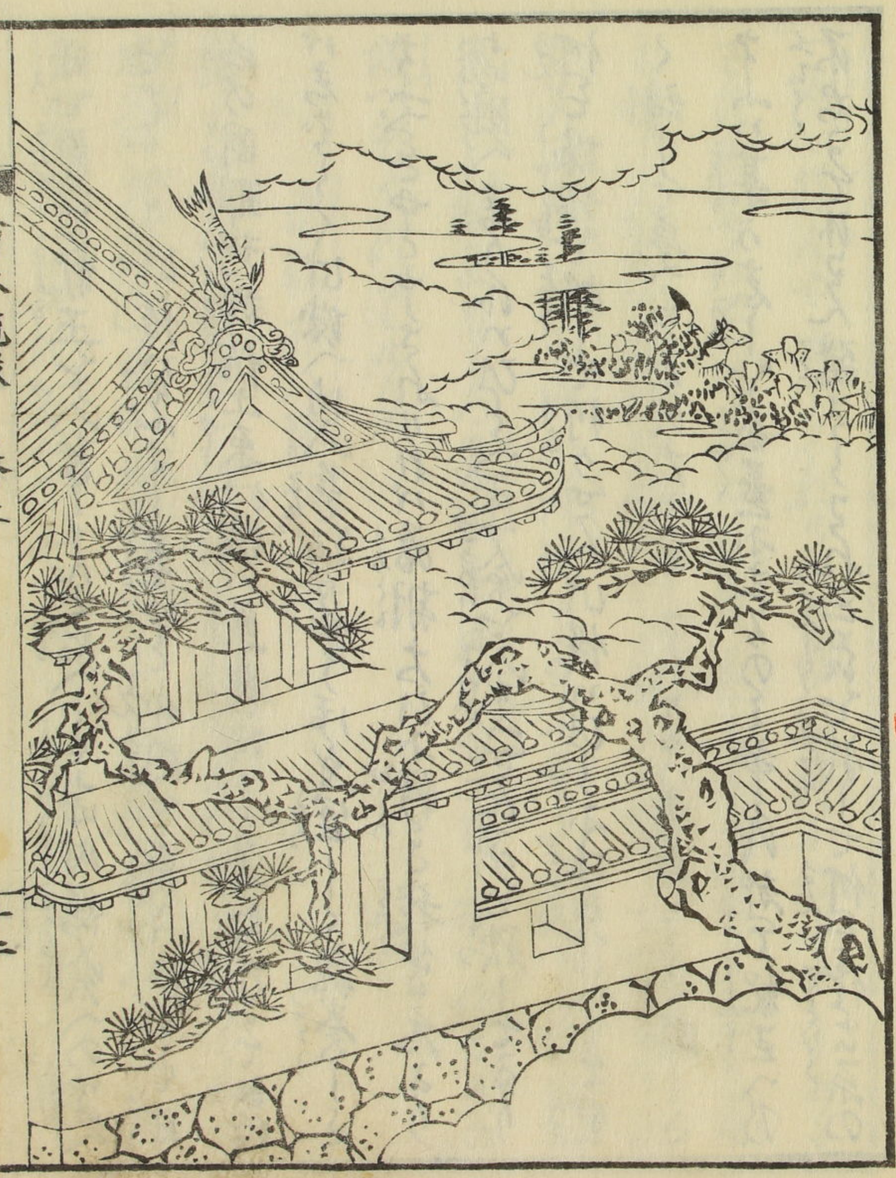
其父爲義と斬罪し新院ふ歎しのふ是ゆへよ其ゆ
絶ふ逆賊長田ゞよふうて死しのふ是因果應報の
ふさしむるふこ只うへゆくもの父爲義と斬のひしい源家
千載ゝ飛躍ふゝずやされ爲ふけるゆと感激して其罪
の輕うゝざるとおそる今新院の皇子重仁親王義ひて
先祖爲義の八男八郎どのとすくひるべ是生よ先祖への
孝養源家長久の祈ゝ為ふゝんとつふゞ仁木武義ふい
ゝ為ずるゆとやされゞれば武義ふ席をあらく再拜し
君い為ふ仁義の大ねりる御仁ふ為ゝ泡ゝゆのふ上い源
家の繁昌御家ゝ長久ゝ為ゝ親王ゝじゆ御曹司を近へ

ゆへ内ゝ同ゝさしゝとさとぶさりる姑爲朝と拒し三人の
家老今さゝふゆへべさ言もゆくふ中ゝ多ゝいゆくしく
ゆひりけとゝ死ゝ人い須義ふ取ゝ三人をよび出し評議
をでふ一決せりゆく親王ゝ下ゝ人ゝと招きをゝん長下
ゝ人ふゝゝび鬼が島へ渡ゝ入國ゆる毋ゝ中へゝる
べし勿論京都へ帰りゆ人親王以下ゝ人ゝるれゞ誘ゆ源
氏ふ殺さるべし予用意となして半途ふ迎へをゝべしと
仰せられい人い大ひこ怒び請ゆふゝゝゞひして又鬼
ゞ渡へ渡りて忠久洋容のよし爲朝ふ云上しられゞる
朝又けよゝと親王ふ拳し那時ふ私の用意とゆし後ふ

薩摩へこそ新たまりさても重仁親王を始め奉る主従つゞ
く薩摩へ入るひとれば大守忠久城下を出迎ひ入て城
内よ情ゝ尽り幸丸の別屋ふ親王を入まつらせさゆぐふ
りて臣まれば皆く悦ぶるかぎり臣時ふ為の中けるい
某保元の合戦より以来江湖の名ふ流流さるるの已ふ
廿余年今命と計国ふ投ぜゝい全く業利と思ふてゆく
ばいろふもして親王と代よ出きまゝんと思ふてろうなり
鈴まで ふ半百ふまでたく繁繁中白うんとれ党法
ハ白駒の走るがごとく矢の弦を離ゝ年月已く
くまて功業ひとくよ建ゞられとうまつ実ふ是ふ今

生の遺感るりといひれば去る忠久中されるいむし
唐土趙の簡頃い年七十五及んで牧業の巳十万騎の大
軍と破まりつるんやは身智勇簡頃ふ新へ勢もまさる
うゝ豊徳業のはざうと慈んやはかくてゆゝんるい
いうんぞ躊ることふ思ふくやたとへ御新百業は後ゝも
コ予一騎の力と出ゝ親王と助け奉ゝせんと云ひれば
為朝恩と謝して拝感ひかくて其後去る忠久家老仁
木武義ると和解ゝ日向の図那珂郡佐土原城い要
害もよく絶景の地るれば親王を後とへまゝんるの出死
ふまくるのたるべゝべとて為朝と据てゆされるい事新て


重仁親王
佐土原
の
城へ
入り
図



城と築て親王を入奉らんと思へども時節会への中へ
とさぐりけ儀いたさ〻遂いとかの内せぬくいはへども日
向の國那珂那佐土原の城の景色ものしうゐ地をそはる
ばかりなく〻けはへ出入奉りの事〻宮〻く執奏〻さ
まへべき中と申されれば薩朝大ひに悔き我身元より
両國へ参りのいひこへよ一命と金ふせんると頼〻てをり
何ど様地と然〻て何ぐうせんけ儀いひ〻ふ出兎ひへとて思
く辞〻て受らまじ有久中されるい出身〻く新〻さ
まへい某が志〻と無量ふさるのこまじ都て親王へ乃
不忠をそひるん様さ〻ふれ三ゐと然〻て何ぞ佐土原の

一城と隠んやと申されれば為弱後ふ辞すかうすあさ
ふじ志〻〻ば先けるすと親王に奏〻申上ふく兎も角
も仕〻んと申られば忠久申さ親王ふ渡〻て頼〻ますあ
ちりれば親王後ふ評議〻の上ふ入れく吉日と
志〻〻親王さじ為朝主従都合二百余人佐土原の
城へぞ〻りけるり

為朝布八陣佐三郎

備も為朝い親王を補佐〻て佐土原城ふ入ふく志る
忠久の義と申し事ふ主従中ふて其恩と報ぜんるのと様
〻為朝又政と正〻て百姓とおさありれば皆千歳下

快せぬ色時ふ有朝つゝ心中ふゝひるゐこれ有間敷よ
入てより有久人と比め家中ハ諸士皆謀とゆてれ交るとい
へども只こゝ西三聖系と喜びざる者ゆりとゝくこゝろ兵乎
ハ其新色とゆても知るべし兵乎と防の用心るくていけふよ
ゞとて常ふ門番に徒乎とるふもあふ要心とゆゝくるが
ゆるゆ天文とゝて大ひふ笑ひされべこと推るふ力ゞ
我等と害せんと謀る者ゆり明夜るゝゞ夜討ふきゝ久
し預じめ汁と用てゝるゞ支配のほどと知ゝゝ国中ハ法令
とてゝゝゝゝ害心るゝ比めんとて先新王ゆもけよゝく養
しゝ手後害ふ諸士と召て中るゐこれ此新天文とゝるふ

大ひ星半女ハ間ふ逆流ハ兵を欲人繁ひ来る此新兆るり
けゆゝふ乎ゝとぞふ汁と揉へゝゝて長男為成須義ハ言二
人とよび出して箇指ふゝくこと汁とおゝくゝ又三丁原の紀年ハ
吉失松浦ハ兵とゝれて汝いゝ年ゝゝふせよとおゝくゝみゝれ
紀八打ゝゝ西人とゝゝて汝二人いか中ゝゝふせよと汁とお
しゝ其身もとぞふ用意と比諸方ゝ配金くゝとのいゝれ
ゞ月のくゝゝとぞ結ゝゝゝ此ゝゝ侍周院忠孫佐久太義ゆ
波多勘家由ハ三ゆいさ紀ふ名久人の御おふおゝて為朝等と
拒ゝれども終ふ手ゝ言葉と用ひられざりゝれゞ心中ふやハ
ゝゝゝゝ二人相謀して中ゝるゐ今主君右久云倫ゝ伝義

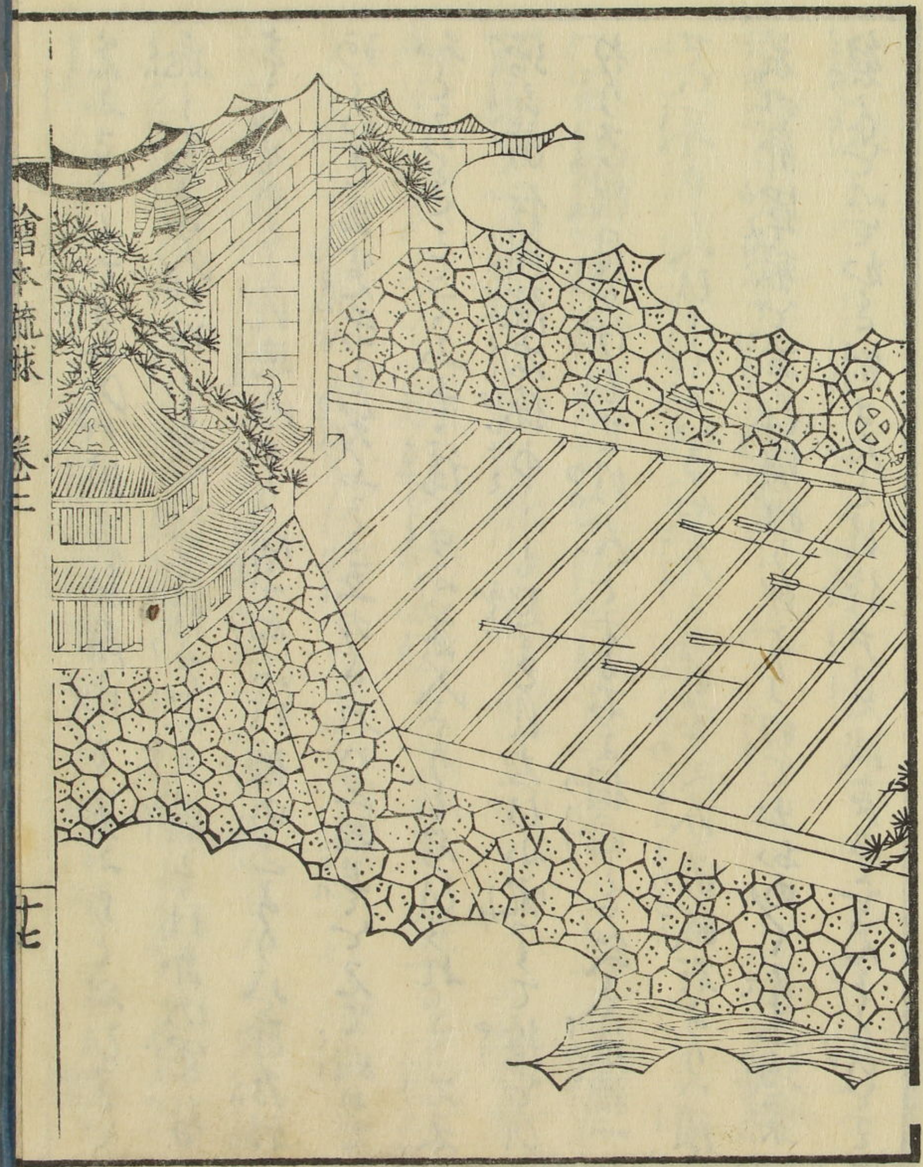
とゝろ〻くよしあさ為朝ホを引入の人〻を部家ゝ為ホ
宮ゝの志ど桑ホ三人来ホ仏と合せ君ホ云上さるとも
ゆく来ホ住云ホふあーよせ其方ざるゝと打破り為朝
泡と首ゆーて其後君ホ云上せん兵一ツよい出家ゝ作さる二ツ
よい家ホぐ云越とも数ずるん似らーて各民百余待の
よ勢と率ひ古老る仁木武蔵当ゆも扶侯せど三ようと
備べて打立さり国ホ建久巳年反月廿六日のゆ如りるが
強ホ天乱時くたまて添風胄ゝ神と呼ろくし羅漢寺ホ
ひるぐくと家ゝゝ馬乗とゆん先ホすゆ勇をすんでおーて
けりくて住云ホちりくるりゝれど先乗候と出て欲ゝ相

為朝自ら城門よりさびーく繰ーて座机よ
りうーて左ホ二人軍士ゆり一人い弓と持下人い甲とりーて
ホホ軍勢ハ一人もえくゆ何さゆ兵い寄ゝ対とおく
ゆと中られど三人の大ゆ大ひふ怪ーく軍勢い手ホとびあ
ゆさ者ゆ色ぢりゝゝ士率と引て宮ホ来んで城ちりくゆ
少ゆ兵ホ上ゆさるりん城門とえくん乗候ぐいひーよ
ゆしも遠ど為朝城門よりるのゆ来て為ホ用人の作一ツ
もえくぐりられど住云大為大ひふりーひされどこと為
朝ぐ智恵ゝゝぐも知ゆさりゝ兵いむ孔明ゆ司馬仲達
と返りしゆ計ゝゆ今城中ゝ者ども我ホぐ夷来ゆさ

あごろに佛まで御しば迎うせらふよりて御和をべき
ゆうかく傳ふ古き針と呂ひ付かゆうふ清ちうるゆうと医
素ふと呼ゆう迎うしゆんとするゆうん人人ちうびに伊戸見
大龍何ぞゆうふちうりうゆと新ゆうどうゆん人人いぐうやをき
ゆくとつきをうくちられば伊周院波多も大ようとひ伊戸
見氏の拝恵よく尚まり素ふが仏も同じとて恵さ白記
へ引うくし馬引よせうく打ゆうぐと者ぐもつぐけとほりうく
ゆりさふ近んで美よせうる兵とて八帝御新おぐ見
弱れし伊とゆうし城門とうけゆうれば二人の大御兵とて
大ふうくひいよく素ぐ拝恵よ遠うびゆ新をぐふゆげへ

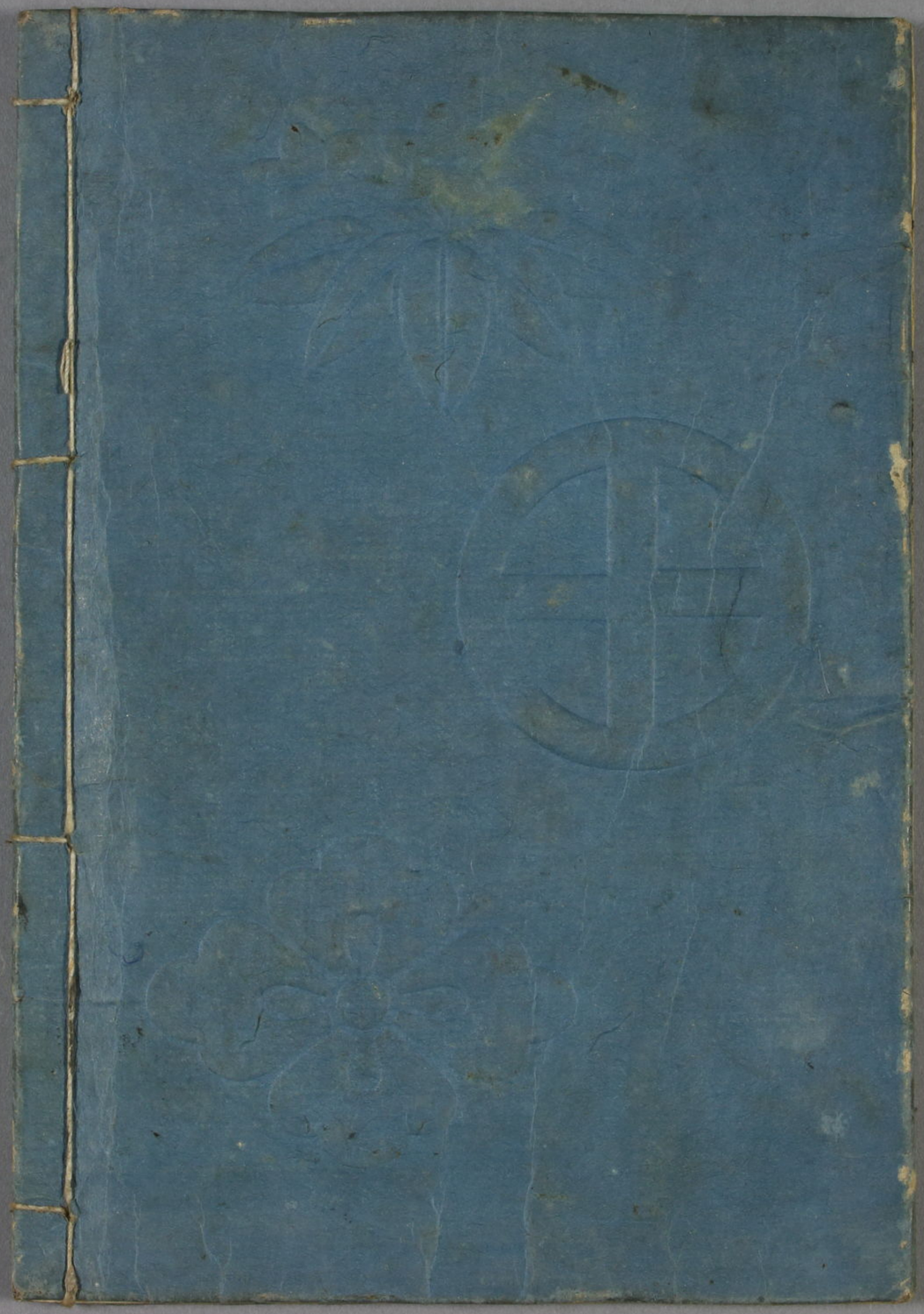
うりおをふうりうく元ふぐれゆうと大勢了成ふ周と他り勇を
もうんで城ぐうふゆうよせ大堀とゆうく城門と打ぐうを
波多勘解由一ぐんよかけへ四方とうる歌を人もゆうく
兵ゆうくふ大石又い竹葉ぐうとるれゆうべゆうとられば波多
勘解由怪んで馬と止め牧縁して進ざうられば伊周院
馬と乗して迎へ波多勘解由ぐ立うるとて何ゆへゆうく
進ざうと云られば勘解由中ゆうるいうれ向ふとうるふ石とゆ
らべ竹葉と引して何ぐ白石陣と布うるふ似ぐうけゆへよ
もうゆうとゆうられば伊周院大ひふうくいはもゆうるゆ
朝ぐ人とゆうどいん傳ゆうく何ぐ思うるゆうんうゆん

志ヶ多三郎
佐土原の城へ
夜うちの景



えふさ〳〵んでうけへば波多勅解由も実ふかとおひるゝと
飛〳〵てうけへばかゝふつゞいて佐戸見大藤それかの軍勢
きゝ人ものこゝに迎へゝうかふかふけ櫓のよりハ帝為朝
かゝ〳〵ゝ出実示と笑ゝ立ゆゝれば三ねゝをとゝて始めて
おどろゝきゝとでふ千達ゆふ義入りとおひられども元来
強気の侍周院忠孫おしも恐まゝ大ひふ吼アて捨とひ
わりあ親月ゞけませわんとする所ゝ相図とゝへゝく疾絶一
せい耳のゝへひゝくゝいるやたより甚ゝみあ成右よりい須
義忠帝軍勢を率ひ城ひりげより切て出おのゝくふ均索
熊ゝとゝてかゝ例さんとゝ佐戸見波多ゝとゝ兵とゝ

けて防うんとゝれゝ係よ雲散霧滅とおろり牡鹿ゝく
もふく吹きゝりて石と飛〳〵砂とはしらせ雲ゝ天地
ふとゝろ紀東西南北ふちうゝく三人の大将とゝ定めゝ
ゝ軍勢粮猟周章て前後を知ゝてかゝふ逃隠れ
生捕るゝ者数しまゝ佐戸見も已ゝ生ゝゝれゝい伊
周院波多大ひふ怒りゝく獅子ゝ吼てゝく義ゝよふゝ一方と
うけ破アて石陣のふふうけ出ふりうゝ後ゝとゝれゝい味方のこ
ゝゝ生捕て呂二人ふるりゝれゝ今ハ生て何うせんあ朝とは
ちゞひ快ゝく討死せんと馬と飛〳〵てゝ切ん入とゝれゝ多勢と
て地ふゝひ二人ゝもおゝし完ゝ中へ義入上ゝんとゝゝゝく西と

為成須崎ゟ兵八方より攻寄て引ゝ[illegible]終ゟ
夫人ゝも生捕ゝとゝゝ為約自ゝ城門ふ上ゟ孔明が伴
達と退ゝ計と表仰ゝるい共三約伊周渡波多
城中へ入ん手術之又城中ふ八陣と布て鷺門と城
戸口ふ向て凡諸和より入者皆鷺門より入ずんば此の門が
入ゝゝ凡中ゝふ区おゝ知て生門八陣ハ元来八ハの門あり死鷺
景用休生傷杜共と八陣ゝゝふ
の和ふ端究と城おゝゝゝぶゝと此方へ切ゆけゝゝ終ふ端究へ
為て安ゝ生ゝ[illegible]之法ゝずんば夫人八陣の法と為ゝ[illegible]て
いんぞ一方と切破ゝゝゝとゆんやゝゝゝゝ為が今日の計人と
怨ましむと得つべし

續本琉球軍記巻之二終